

主 題：信仰者として成功するための秘訣
 聖書箇所：使徒の働き 20章17－24節

皆さんはパウロがこのように語ったみことばを覚えておられるでしょう。「**私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください。**」（Iコリント11：1）。信仰者パウロの生きざまは、時代を越えてすべての信仰者の模範です。パウロは第三次宣教旅行にあつて、エペソから約50キロ程南に位置するミレトという町に着きました。そして、そこで彼はエペソの長老たちを呼んで、彼らに警告と奨励のメッセージを与えました。そのメッセージを今から私たちは見て行くのですが、パウロが与えたメッセージを見ると、パウロが信仰者としてどのように生きて来たのか、そこに彼の証を見ます。そして、このパウロのメッセージこそ私たち信仰者一人ひとりがどのように生きて行くのか、また、信仰者とはどのように生きる者たちなのかということを考えさせられるのです。

今日、私たちは使徒の働き20章17節から、神のみことばを見て行きたいと思います。そして、願わくは、パウロが言ったように「私を見ならってください。」と私たちも彼と同じような歩みをもって主に栄光を帰す者へと変えられたいものです。この箇所から私たちは四つのことを見て行きます。

☆パウロの生き方

A. 人々の模範として生きた 18節

17－18節「パウロは、ミレトからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼んだ。：18 彼らが集まって来たとき、パウロはこう言った。「皆さんは、私がアジヤに足を踏み入れた最初の日から、私がいつもどんなふうにあなたがたと過ごして来たか、よくご存じです。」、18節でエペソの長老たちに「私がエペソにいたときに私がどんなふうにしたのか、あなたがたは覚えているでしょう？」と言います。というのは、エペソの人々はパウロが日々どのように過ごしたのか、そのことを実際に見ていたからです。このことばを見ると、パウロが言った「あなたがたも私を見ならってください。」ということばをどうしても考えてしまいます。パウロはそうに言うだけではないのです。パウロは確かに、人々の前で模範として生きていました。ということは、皆さん、私たち信仰者にとっての大きな責任は、イエスを信じた後、私たちは後に続いて来る者たちに模範を示すということです。私たちは彼らの模範として歩んで行くのです。パウロはテモテに対してこのように言いました。Iテモテ4：12「**年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。かえって、ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範になりなさい。**」、相手がテモテだからこのように言ったと言われるかもしれませんが。しかし、ここで言われていることは、時代を越えて私たちに対するメッセージです。パウロは「テモテ、あなたは生きなさい。人々の模範となりなさい。」と言ったのです。

皆さん、最初から話しているように、私たち信仰者にはこれと同じ責任があるのです。同じことを神は私たちにも望んでおられるのです。私たちはよくこのように言います。「私を見ないでイエスだけを見なさい」と。特に、私たち日本では良く耳にすることばです。でも、パウロはそうには言わなかったのです。パウロは「私を見なさい！」と傲慢にそのように言ったものではありません。彼は自分が弱い者であり愚かな者であり失敗する者であることを知っていました。その上で彼は言ったのです。それは彼が失敗をした時に正しくそれに対処し、そうして人々に模範を示すことが出来るからです。なぜなら、だれでも失敗をしますが、それを隠すことも出来ます。しかし、パウロはその失敗に対して、正しくそれに向き合って、正しくそれを解決しようとした、だから模範を示すことができたのです。

テモテに対してパウロが教えたメッセージをよく見ると、パウロはどのようなことを頭に描きながら語ったのかが明白です。まず、(a) ことばにおいてあなたは人々の模範となりなさいと言います。どうでしょう？皆さんのことばは神の知恵と愛に溢れていますか？ことばによって罪を犯すことの多い私たちです。言わなくてもいいことを言ってしまうたり、正しいことを間違った言い方で言ってしまうたり、ことばにトゲがあったりしませんか？(b) 態度において行ないにおいて模範となりなさい。いろいろなことが周りに起こり、いろいろなことを経験しますが、その中であつて正しく振る舞って行くようにと言います。(c) 愛においても模範を示しなさい。(d) 信仰においても模範となりなさい。どのようなときも主を信頼するようと言います。(5) 信仰の潔さにおいて模範となるべきだと、そのようにパウロはテモテに勧めたのです。そして、パウロはそのことを私たちにも同じように勧めるのです。信仰者であるなら、私たちは後に続いて来る者たちに対して模範となっているようにと。ですから、どうぞ「私を見ないで主を見上げなさい。」と言わないでください。とても信仰的に聞こえるのですが、悲しいことに聖書的ではありません。「私は失敗を繰り返し私は弱いけれど、でも、私は一生懸命主に喜ばれる

ように生きて行きたい。そのように生きようとしているからどうぞ私を見てください。」と、そのように自分の行動に責任をもって生きる信仰者になることです。パウロはそのようにテモテに勧め、そして、自分自身もそのように生きていたのです。

皆さん、私たちは「霊的な人」と口にしますが、霊的な人とはどのような人でしょう？それは信仰において人々の模範となっている人です。パウロはエペソ教会の長老たちをミレトに呼びました。長老たちは知恵のある者たちです。すなわち、その人たちは神の前に正しいことが何であるかを見極めることが出来る人たちです。だから、知恵があるのです。この世の知恵とは違うのです、神のみこころをしっかりと探って、それを見出すことが出来る知恵です。どのような時でも神のおことばに照らし合わせて、何が神の前に正しいかを判断できる人たちです。それが知恵のある者たち、それが長老たちだと言うのです。その人たちを招いてパウロはあなたがたのところにいたときに私が模範として生きていたように、あなたがたも人々の模範として益々歩んで行くようにと勧めるのです。

B. 真の目的に添って生きる 19 節

19 節「私は謙遜の限りを尽くし、涙をもって、またユダヤ人の陰謀によりわが身にふりかかる数々の試練の中で、主に仕えました。」、つまり、真の目的に添って生きるということは、私は何のために生きているのか、だれのために生きているのかをしっかりと覚えて生き続けるということです。私たちは何となく生きているのではありません。目的を持たずに生きているのではないのです。神はすばらしい目的を私たちに明らかにしてくださいました。私たちイエス・キリストを信じる者は、何のために生きているか、だれのために生きているのか、そのことをしっかりと知っている者たちであるはずですが。パウロはその目的を覚えて日々を生きていたのです。彼はこのように言います。「主に仕えました。」と。それが目的だと言うのです。そのために生きていると。「主に仕える」ということは、自らが主の奴隷であること、それゆえに、私は主人であるこの方を喜ばせる目的のために生きるということです。主の奴隷であるから主人に喜んでいただくとするのです。

このことは、聖書を通してパウロが繰り返し私たちに教えていることです。例えば、Ⅱテモテ 2：4 では兵士とその上官のことにについて教えています。兵士という例えを用いて、今私たちが見ていることを教えようとしています。彼はこのように言いました。「兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。それは徴募した者を喜ばせるためです。」、つまり、兵士はある一つのことだけを考えて兵役についていると言うのです。兵役についていながら、日常生活のことをいろいろ考えながら歩むような兵士はいないと言うのです。兵士として必要なことは、兵士としての責任をしっかりと全うすることです。自分の上官を喜ばせるために最善の努力を為すことです。その例えをもって、私たちイエス・キリストによって贖われた者、救われたクリスチャンたちは、主人である主を喜ばせること、それをしっかりと目標に据えて、その目的のためにだけ生きる者たちだとパウロは言うのです。

なぜ、そのことが大切なのでしょうか？そのことは皆さんよくご存じですが、もう一度考えてみてください。主を喜ばせる人生とはどのような人生でしょう？それはみこころに添った人生です。主を喜ばせる人生、主を喜ばせるためにはみこころに従わなければいけません。そして、あなたがみこころに従って歩んで行くなら、神のみ栄えが現わされて行くのです。

そして、あなたがそのように歩んで行くときに、主があなたを益々祝してくださるのです。そして、あなたを通して主のすばらしさが世に明らかにされて行きます。だから、主を喜ばせる人生、主のみこころに添った人生、神の栄光のために生きる人生はバラバラではなく、すべて関連しているのです。あなたが主に喜ばれるように生きようとするなら、必ず、あなたはそのためにみこころに従わなければいけません。みこころに従うなら主に喜ばれるだけでなく主の栄光を現わして行きます。だから、私たちは考えることが必要なのです。神に喜ばれることはいったい何か、そのことをしっかりと考えてそれを正しく判断することが私たちには必要なのです。そのことが判断できる人、それが知恵のある長老と呼ばれるにふさわしい者たちです。私たちがどのように思うかなどはどうでもいいのです。神がどのように思われるかに基づいて私たちは判断しなければいけないのです。言い方を変えるなら、私たちは常に神のみことばに自分を照らし合わせて、そして、神の前に正しいことを判断して行く、それが長老たちです。だから、知恵のある者たちと言われるのです。

パウロは自分の人生の目的が何なのか、その目的を述べるのですが、同時に、その目的を果たすために、主に仕えて行くために大切な三つのことを証しています。彼はこれらのことをしっかりと覚えながら主に仕え続けたのです。一つ目は「謙遜の限り」、二つ目は「涙をもって」、三つ目は「数々の試練の中で」です。私たちは主に忠実に従い続けたパウロの特徴をここに見ることが出来るのです。

1) 謙遜

「謙遜」とは何を意味しているのでしょうか？パウロは自分のことを正しく知っていたということです。主に仕えて行こうとするなら、私たちは自分のことを正しく知る必要があります。それによって私たち

は人から言われなくても砕かれて行くのです。自分のことを正しく知れば知るほど、私たちは神の前に誇るものは何もないということに気付かされます。自分のことを正しく分かっていたら様々なことをもって私たちは自分を誇り始めるのです。「私はこれだけの教育を受けています。これだけのことをしました。これだけの奉仕をしています。」と、そのような全く価値のないものをもって自らを誇ろうとするのです。でも、神の前に自分がどんな存在であるかを示されて行くほどに、「神さま、私は何もあなたの前に誇ることがありません。」と、パウロのことばを借りるなら「**このような人について私は誇るのです。しかし、私自身については、自分の弱さ以外には誇りません。**」(Ⅱコリント12:5)と言います。彼は自分のことが良く分かっていたのです。何度も何度も失敗を繰り返す者、愚かだと思ふことを何度も繰り返してしまう、自分は弱くてもうどうしようもない者だと、そのことに気付いていたから彼は「私が自分に関して誇ることができるのはただ一つ、自分の愚かさです。」と言います。そして、彼は主を見上げた時に「この方が私の誇りです」と言ったのです。

ですから、ガラテヤ人への手紙の中で「**しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。**」(6:14)と言いました。それまではパウロは自分の家系や自分の身分、自分が受けた教育などのこの世的なものを誇って来しました。ところが、信仰の成長とともに自らの姿が明らかになるほどに、「私は何も誇れない。誇れるのは自分の愚かさしかない。自分の弱さしかない。そして、このような者をこれほどまでに愛して救ってくださった神しかない。」と、そのような信仰者へと変えられたのです。ですから、へり下らなければいけないからへり下ったのではない、彼は自分を正しく知っていたのです。そのときに、彼は神の前に謙虚にされ、そして、謙遜の限りを尽くして主に仕えたのです。主に仕えることが出来る、こうして主によって用いられることは私にとって大きな感謝、大きな恵みですと言うのです。

2) 涙をもって

パウロは自分のことを正しく知っていただけでなく神のことを知っていました。神のみこころを知っていたのです。神はどのような思いを抱かれるのか、そのことを知っていたのです。ですから、この箇所以外でも「涙を流している」、「悲しんでいる」というパウロ自身のことばが聖書に出て来ます。その箇所を見ると、パウロは神のおこころをよく知っていたことが分かります。

(1) 兄弟姉妹の罪に関して

例えば、Ⅱコリント2:4「**私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに、あなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私があなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を知っていただきたいからでした。**」、パウロはコリント教会の人たちが罪の中を歩んでいることを知っていました。そして、その現状に対して心を痛めていたのです。なぜ、彼は心を痛めていたのでしょうか？神が悲しんでおられることを知っているからです。信仰者が罪の中を歩むことに神は心を痛め悲しまれます。それゆえに、兄弟姉妹を愛する者たちは、罪の中に陥っている兄弟姉妹がいるなら、見て見ぬ振りをするのではなく、その兄弟姉妹に「あなたは罪を犯しています」と言って、その罪から悔い改めて立ち返ることを命じるのです。なぜでしょう？神がそれを望んでおられるからです。

マタイの福音書18章には「戒規」のことが記されています。兄弟が罪を犯したらどうすれば良いのでしょうか？神はその罪を責められます。私たちイエス・キリストを信じる者は、同じように、兄弟姉妹が罪を犯しているなら「あなたは間違っている。」と言って、彼がその罪から離れ悔い改めるように勧めるのです。それは彼をさばくためではないのです。彼を愛するがゆえです。ですから、パウロは、このコリントの教会のクリスチャンたちが罪から離れて正しく歩むようにと彼らを責めたのです。でも、パウロが言ったようにそれは「あなたたちを愛するから」です。パウロはしっかり神のおこころを知っていたのです。そして、神が望んでおられるように彼は行動に至るのです。

(2) 真理から外れることに関して

二つ目に「**涙をもって**」というのはピリピ3:18を見てください。「**というのは、私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。**」と、パウロは何を言っているのでしょうか？偽りの教師たちが教会に入り込んで来て、人々を惑わして、信仰者が真理から外れて行くことに対して、彼は心を痛めていたのです。なぜなら、それは神ご自身が同じように思われることだからです。神はイエス・キリストを信じる者たちがしっかりと信仰に立って、真理に立って歩んで行くことを望んでおられる、そして、その真理から外れるなら、神はその人たちを懲らしめて真理に立ち返るように働かれます。パウロはそのことを知っていたので、偽りの教師たちの惑わしに対して警告を与えるのです。そして、どんな時にも真理を語り続けなさいと教師たちに命じています。パウロは兄弟姉妹が罪を犯すことに対して、神はそのことをご覧になって心を痛めておられると、そのことを知っていたゆえに、彼も心を痛めて彼らに悔い改めを命じたのです。いろいろな間違った教えによって人々が混乱する様子を見て、神が心を痛めておられる、同時に、パウロも心を痛めて、

人々が真理に立ち返るようにと勧めるのです。

(3) 救われていない人に関して

三つ目に、ローマ 9：2「**私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。**」と述べています。パウロは自分の愛するイスラエルの民、自分の同胞たちがこの救いを拒み神に逆らっている様子を見て心を痛めていたのです。こんなにすばらしい救いが備えられているのに、その救いを拒み続けている人々を見てパウロは心を痛めていた。なぜなら、主は同じように、この救いを拒む者たちに対して思いをもっておられるからです。主はすべての罪人が悔い改めに進むことを望んでおられます。

ちょうど、イエスがマタイ 9：36で「**また、群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかawaiiそうに思われた。**」と言われたことと同じです。イエスは救いを拒みながら歩んでいる人々を見てあわれみの思いを抱かれました。パウロも同じように、救いを拒んでいる者たちに対して思いをもったのです。私たちは主がどのように思っておられるかということを考えながら行動しているのでしょうか？兄弟姉妹に対して、また、イエスを信じていない皆さんに対して…。パウロはこのように涙をもって、主のみこころを正しく理解し、正しく知って、そして、主が思われるように彼も行動を取っていたのです。

3) 数々の試練の中で

三つ目に出て来るのは「**数々の試練の中で**」です。パウロは主を信じることはどういうことかを知っていました。信仰に伴う代価というものを知っていたのです。イエスを信じることは、そこには必ず苦しみがつき、そこには必ず迫害がつき、そこには必ず、敵対する者たちが出て来ると。家族の中にもイエスはお話になりました。そして、パウロはそのことを分かっていたのです。イエスを信じたならばすべてがバラ色になります…。そうではないことを知っていました。イエスを信じることによって、しかも、イエスに忠実に従って行くことによって迫害を受けるということを知っていたのです。

ペテロが I ペテロ 4：12-13でこのように言いました。「**愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。**」、つまり、いろいろな問題は偶然ではない、様々な迫害、苦しみは偶然に起こるのではない、そこにはしっかりした神の完全な計画があると言ったのです。そして、その上でペテロは、どうすればそのような中にあってもあなたは勝利出来るのかという、その秘訣まで教えています。その中であって「**あなたは喜びなさい**」と言います。なぜ、喜ぶことが出来るのでしょうか？神がすべてを支配しているからです。神がすべてのことをご存じだからです。そして、神があなたのために与えてくれたものだとしっかり覚えることによって喜ぶことができるのです。悲しみ、痛みは残るかもしれませんが、でも、神がご存じだというその真理が私たちの心を変えて行ってくれるのです。

そして、この 19 節には「**常に主に信頼を置いていなさい**」と教えます。辛くても主を信頼していなさい、大変でも主をしっかりと見上げて信頼していなさい、主が必ず、みこころを為してくれるからと。パウロは何のために生きているのかを確かに知っていました。私の人生、その目的は主に仕えることだと。そして、彼は主に仕え続けたのです。しっかりと自分を正しく知った上で、主のみこころを知った上で、そして、信仰に伴う代価を知った上で仕え続けたのです。

C. 主の命令に忠実に従い続けた 20-21 節

パウロは主の命令に従おうとしていたのです。20-21 節をご覧ください。

1) 教化

20 節では「**益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え、**」と、「**人々にとって益となることを教え続けた**」と述べています。何の働きのことでしょうか？「教化」のことです。彼らの成長のために、この信仰者の信仰が成長して行くために、益になることを彼は教え続けたのです。どこでも人々の前でも家々でも、機会があれば、機会を作って大切なこと、益になることを教え続けたのです。パウロは教えるという「教化」の働きをしていたのです。

2) 伝道

そして 21 節「**ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです。**」、何の働きですか？「伝道」です。彼はユダヤ人であろうと異邦人であろうと関係ない、私はこの福音のメッセージを語ったと言っているのです。福音のメッセージ、どのようなメッセージか見てください。「**神に対する悔い改め**」と「**主イエスに対する信仰**」です。これが福音のメッセージです。

(1) 悔い改め

皆さんよくご存じです。偶像から真の神に立ち返ることです。I テサロニケ 1：9 で教える通りです。「**私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、**

生けるまことの神に仕えるようになり、」。さらに言うなら、悔い改めというのは自分の罪深さと自分の努力や行ないによって救いを得ることが不可能であることに気付いた者が、本当の自分に気付いた者が、主に逆らい続ける生き方を止めて、主である唯一真の神を信じることです。偽りの神を信じてきた私たちが真の神を信じるのです。自分が神の前に間違っていた、罪を犯して来たことに気付いて、真の神を信じることです。そうすると、罪の結果である地獄が恐ろしいからイエスを信じますというのと、ここでパウロが語ったメッセージとは違うのです。「私は罪人で地獄に行きます。それは恐ろしいです。私は地獄でなくて天国に行きたいからイエスを信じます」というメッセージと、パウロが言っている「悔い改めのメッセージ」とは違うのです。なぜなら、「地獄から逃れたい、天国に行きたいからイエスを信じる」というのは、結局のところ、それは自分の欲しいものを願っているにすぎないからです。私たちが生まれながらに信じて来た宗教と何ら変わりがありません。ご利益宗教です。

天国に行きたいから信じるのではないのです。私は神の前に間違っていたから、その罪を悔い改めて神の前に正しくありたいとするのです。その結果、何もいただかなくても仕方ないのです。私たちは天国に行く資格のない者だからです。私たちは永遠の滅びに至っても当然の者だからです。シカゴにあるムーディー教会をかつて牧会されたアイアンサイドという神学者はこのようなことを言っています。もう今から何十年も前のことですが、「私は福音派と称する多くの牧師たちが、人々に悔い改めを命じることがほとんどないことを知っている。しかし、使徒の働きや書簡を学ぶなら、使徒たちの宣教において、悔い改めが頻繁に語られていたことに気付くであろう。」と。聖書を見るなら、彼らのメッセージは「罪の悔い改め」のメッセージです。ところが、残念ながら、そのようなメッセージが語られなくなったと言うのです。ペテロも悔い改めを命じました。パウロも悔い改めを命じました。アテネに行ったときにパウロが言ったことは、どこでも今神はすべての罪人に悔い改めることを命じていると語りました。しかし、悲しいことに、そういうメッセージがなくなってしまったと言います。

(2) 主イエスに対する信仰

「罪の悔い改め」だけではなく、もう一つ見たいのは「主イエスに対する信仰」です。21節に「**私たちの主イエスに対する信仰**」とあります。つまり、自分の罪を悔い改めて真の神、主である唯一の神を信じるだけでなく、十字架による身代わりの死と復活によって、主ご自身が備えてくださった唯一の救いを心から信じ受け入れることです。このイエス・キリストの備えてくださった救い以外に、人間が、罪人が救われる術はないのです。ここにだけ救いがあるのです、この方だけが救い主であり、この方だけが信じる者に救いを与えることのできる唯一のお方なのです。このメッセージをパウロは語ったのです。そして、もう一度思い出してください。この20-21節で言われている「教化と伝道」は、イエスご自身が命じられたことでした。大命令です。「**それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子となさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、**」(マタイの福音書28:19)、弟子を作りなさいと言われました。弟子を作るためにはキリストの福音を語らなければいけないし、語った者たちを訓練しなければいけません。その大命令をパウロ自身が実践していたのです。その証をしているのです。信仰者の皆さん、あなたはこのイエス・キリストからいただいたこの大命令を実践しておられますか？これは教会のだれかに与えられたのではないのです。イエス・キリストを信じる一人ひとりに、時代を越えてイエス・キリストご自身が与えられた命令です。あなたに与えられている命令です。キリストの福音を語っておられますか？そして、神のおことばによってその人たちが成長するように労していらっしゃるでしょうか？パウロはその命令に忠実に従ったのです。彼は主の命令に忠実であったと、確かに、20-21節でそのことを私たちに教えます。

3) リーダーとして

28節「**あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。**」。教化をしたパウロ、伝道したパウロ、同時に、三つ目にパウロはリーダーとしてその働きを為したのです。「**教会を牧させるために…群れの監督にお立てになった**」とあります。教会の説明があります。神の教会とは「**神がご自身の血をもって買い取られた**」ものであると言います。つまり、ここで言っていることは、建物のことではないことは明らかです。主イエス・キリストがご自分の血を流すことによって、いのちを犠牲にすることによって救いに至った信仰者たちのこと、クリスチャンたちのことです。その人たちに対してリーダーは何をするのでしょうか？

○リーダーの働き

(1) 牧する：パウロはこのように言います。「**自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。**」と。そして、その教会を「**牧させるために**」と言います。牧師、羊飼いです。羊を養うことが目的です。神がご自身の犠牲をもって救いへと導いて来た人々をあなたがたは牧して行きなさい、彼らの霊的 necessary を養って行きなさいと言うのです。

(2) **監督**：その後「あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。」とあります。「監督」ということばが出て来ます。その群れ全体を見守る者たちです。彼らは正しく歩んで行くために見守る人たちです。そうすると、17節にあるように、このメッセージはエペソの長老たちに語られました。「パウロは、ミレトからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼んだ。」。その長老たちに対してパウロが言ったことは、「神はあなたがたを救われた者たちを牧する者としてお立てになった。そして、その群れをしっかりと監督する者としてお立てになった。」です。

(3) **長老**：長老や牧師、監督というのは同じ働き人を指しています。その働き人がどのような人なのかを説明したのです。長老とは知恵がある人です。見て来たように、しっかりとみことばに基づいて判断できる者です。牧師というのは務めです。しっかりとその羊を養って行きなさいと言います。監督というのは間違った方向に行かないように全体をしっかりと守って行くのです。

だれが彼らを選んだのでしょうか？見てください。「聖霊によって」です。神がそのような働き人を群れにお立てになったのです。パウロはそのことを知っていました。そして、知っていたゆえに彼らにはその与えられた務めを忠実に果たそうとしたのです。

最初に話したように、私たちイエス・キリストを信じて救われた者たちは群れの模範になりなさい、信仰者の模範として歩んで行きなさいとパウロは言いました。ということは、もし、あなたがそのような歩んで行くなら、あなたは霊的なリーダーへと成長して行きます。模範として歩んで行くためには、しっかりとみことばを見て、みことばを学んで、みことばに従って行くことが必要だからです。そして、そのようにあなたが歩んで行くとき、あなたの信仰は成長し、あなたは霊的なリーダーとして用いられるのです。そして、その中のある一部の者たちが監督であり、長老であり、そして、牧者です。

ですから、神がご自分のいのちをもって救ってくださった者たち、救われた私たちはみな成長するという責任をもって生きているのです。そして、成長することによって私たちは神のお役に立つことが出来るのです。教会はそのような霊的な人たちが神から任された働きを為して行くところです。そのようにパウロはここでエペソ教会の長老たちに大切なことを教えるのです。

D. 優先順位を守る 22-24節

最後の22-24節に、パウロの生き方の四つ目を見ることが出来ます。模範として生きたパウロ、生きる目的をしっかりと覚えて生きたパウロ、そして、主から与えられた目的に忠実に従ったパウロ、四つ目に見ることは、優先順位を守ったパウロです。22-23節にはこのように記されています。「いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にどんなことが起こるのかわかりません。：23 ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみ私が私を待っていると言われることです。」、何が起こるかわからない、でも、わかっていることは聖霊が私に教えてくれたようにエルサレムでは大変な苦しみがあることだと言うのです。私たちはそのようなことを知っていたら怯みます。何とか苦しみや問題を避けて通るようにと考えてしまいます。ところが、パウロはそうではなかったのです。「私は逃げません。喜んでエルサレムに向かって行きます。」と言うのです。なぜ、そのようなことができたのでしょうか？パウロは正しい優先順位をしっかりともっていたからです。見てください。24節「けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」、パウロは知っていたのです。私には神から与えられた大切な務めがあると。「主イエスから受けた…任務を」と書いています。どのような任務でしょう？「神の恵みの福音をあかしする」という任務です。この「あかしする」ということばですが、これは「厳粛に言明する」ということです。王から伝えられたメッセージを正確に伝える、そのような働き人の働きのことです。だから、厳粛に言明する、厳粛に伝えると言うのです。パウロは神からいただいたメッセージを恐れをもって受けていたのです。今、私たちが見て来たように、神からいただいた福音のメッセージを、これは神のメッセージだと彼は恐れをもって語ったのです。

残念ながら、ある方からこのような質問を受けました。引っ越した後、いろいろな教会に行ってみたが、ある教会では、確かに、聖書は開くけれど聖書以外のこと、語っている人の話がされています。どう思いますか？聖書のことばを読んでもそこに戻って来ないで別の話で終わってしまうと言うのです。確かに、今、キリスト教会の流れは、私たちが知っているように神が言われているメッセージを正確に学んで伝えるというメッセージはダメとしています。しかし、パウロのこのあかしを聞くとき、パウロ自身が私たちに教えていることは、パウロは神のことばを正確に語り続けようとしたことです。それは彼のすることばによって証言されています。私たちは自分のメッセージを語るために立っているのではないのです。皆さんも私の個人的な考えを聞くためにここに来られているのではありません。そう信じます。皆さんも神のおことばが何を言っているのかを聞くために来られているのです。ですから、私たちはその責任を持っているのです。なぜなら、私たちの役目は、王のことばを人々に正しく伝えることが責任だからです。パウロが言ったように、この神のことばを厳粛に言明する、人々に伝えて行く、それが私

が神からいただいた務めなのです。なぜなら、これは神のメッセージだからです。しかし、メッセージにいろいろなものが混ざって来てしまったのです。人が救われるために救われ易いようなメッセージを語ろうというその動機は理解できない訳ではありません。でも、それは正しい動機ではない。というのは、私たちが人を救うのではありません。私たちの責任は王のメッセージを正しく伝えることです。それが私たちの責任です。そして、それが信仰者である皆さんの責任です。あなたがどう思うとか、どう感じるかなどはどうでもいいのです。神が何をおっしゃっているのか、それを語らなければ神のみわざは決して為されないのです。神のみわざが成ることを期待するなら、私たちは神のマニュアル通りにやらなければいけないのです。神のおことばをその通りに語れと言います。それが私たちの責任です。そして、パウロはそのように生きたのです。

18世紀の一人の大説教家、ジョージ・ホイツフィールドという牧師がいます。イギリス人です。イギリスで、また、アメリカでキリストのメッセージを語り続けた人物です。1740年には、英国で一万二千人の人々が集まって、メッセージを聞いた彼らが罪を示されて泣き叫ぶその声でメッセージが聞き取れなかったほどだと言われています。この大説教家がこのようなことを言うのです。彼はすばらしい説教家でしたが、メッセージをした後、人々が集まって来てそのメッセージを誉め称えました。ある時、彼はその人々に対してこう言ったのです。「講壇から降りる前にサタンが私にそのように語りました。あなたが言っているようにサタンが私に語りました。」と。わかりますでしょ？サタンは言うのです。「すばらしいメッセージを語ったな」と。そうして私たちが高慢になるようにと誘惑するのです。この大説教家はわかっていました。彼は自分が誉められることなどどうでもよかったのです。そして、私たちも同じです。自分が認められる、自分が誉められることなどはどうでも良いことです。私たちの務めは神のメッセージを忠実に語ることであり、そして、そのメッセージをくださった神が誉められることです。ジョージ・ホイツフィールドはこう言います。「私よりも福音を上手く語れる人は多くおられるでしょう。しかし、だれもこの福音よりもすぐれた福音を語ることは出来ません。」と。分かりますか？自分よりもメッセージを語るテクニックにおいて上手な人はもっといるだろう。でも、自分の語っているその福音のメッセージに勝るメッセージはどこにもない。なぜなら、このメッセージこそが神のメッセージだということを確信していたからです。つまり、彼も神のおことばを忠実に語ることが自分の使命であることをしっかり覚えていたのです。しかも、その責任を果たすために彼は恐れをもってその働きをしていたのです。

パウロはそのように生きていたのです。そして、その大切な神から与えられた責任に対して彼はこう言うのです。この責任を果たすことは私のいのちよりも大切だと、**「神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」**、この「惜しい」ということばは「高価、貴重、値うちのある、尊い」という意味です。彼が言っていることは「私のいのちとこの任務を果たすことを比べるなら、この任務を果たすことの方が私には価値がある。」ということです。パウロはその任務をないがしろにして、妥協しながら何とか楽しもうなどと思っていたのです。彼は神がくださったこの人生、神が与えてくださった任務を全うすることだけを考えて、そのために生きたのです。ですから、どちらが大切かと言われたら、「この任務を果たすこと、それが私の最優先事項だ」とそうして彼は人生を全うしたのです。だから、彼はこう言ったのです。**「私が自分の走るべき行程を走り尽くし」**と。彼は何が神の前に大切なのかということをしかりと覚えて、その優先順位に沿って一番大切なことのためにいのちを注いだのです。皆さんはそのように生きていますか？神が私にくださったこの任務、先程から見てるように、この大命令はあなたに与えられた大切な任務です。「その大切な任務を果たすために、私は喜んでいのちをかけてやりましょう。その任務を果たすことは私のいのちよりも大切だ。」と、そのような思いをもってこの神の与えてくださった務めを果たそうとしているのでしょうか？

26節を見てください。**「ですから、私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。」**、パウロはなぜこのように言ったのでしょうか？それは彼が語るべきことを全部語ったからです。彼はイエスを信じる者たちに、信仰者としてどのように生きて行くべきかを語ったのです。それを受け入れるかどうかは信仰者一人ひとりの問題だと言うのです。パウロは彼らが知らなければいけないことを全部語った、だから、彼らがそれを聞かず神の祝福を逃しても、残念ながら、それは私の責任ではないと。パウロはイエスを信じていない人たちに福音、救いのメッセージを語ったのです。それを信じるか信じないかはその人たちの問題だと言うのです。もし、私とそのメッセージを語らずに彼らが滅んでしまったなら、その責任は自分にある、しかし、私は語るべきメッセージを語った、ゆえに、彼らがどのような選択をするかそれは彼らの問題だ。パウロはそのように言っているのです。まさに、これはエゼキエルが言ったことです。ですから、パウロはこのみことばを記しているときに、恐らく、エゼキエル書3章のみことば、また、同じことが33章でも繰り返されていますが、そのことばを覚えていたのでしょうか。エゼキエル 3：17－21 **「人の子よ。わたしはあなたをイスラ**

エルの家の見張り人とした。あなたは、わたしの口からことばを聞くと、わたしに代わって彼らに警告を与えよ。：18 わたしが悪者に、『あなたは必ず死ぬ。』と言うとき、もしあなたが彼に警告を与えず、悪者に悪の道から離れて生きのびるように語って、警告しないなら、その悪者は自分の不義のために死ぬ。そして、わたしは彼の血の責任をあなたに問う。：19 もしあなたが悪者に警告を与えても、彼がその悪を悔い改めず、その悪の道から立ち返らないなら、彼は自分の不義のために死ななければならない。しかしあなたは自分のいのちを救うことになる。：20 もし、正しい人がその正しい行ないをやめて、不正を行なうなら、わたしは彼の前につまずきを置く。彼は死ななければならない。それはあなたが彼に警告を与えなかったので、彼は自分の罪のために死に、彼が行なった正しい行ないも覚えられないのである。わたしは、彼の血の責任をあなたに問う。：21 しかし、もしあなたが正しい人に罪を犯さないように警告を与えて、彼が罪を犯さないようになれば、彼は警告を受けたのであるから、彼は生きながらえ、あなたも自分のいのちを救うことになる。」

33：1-9

「次のような主のことばが私にあった。：2 「人の子よ。あなたの民の者たちに告げて言え。わたしが一つの国に剣を送るとき、その国の民は彼らの中からひとりを選び、自分たちの見張り人とする。：3 剣がその国に来るのを見たなら、彼は角笛を吹き鳴らし、民に警告を与えなければならない。：4 だれかが、角笛の音を聞いても警告を受けないなら、剣が来て、その者を打ち取るとき、その血の責任はその者の頭上に帰する。：5 角笛の音を聞きながら、警告を受けなければ、その血の責任は彼自身に帰する。しかし、警告を受けていれば、彼は自分のいのちを救う。：6 しかし、見張り人が、剣の来るのを見ながら角笛を吹き鳴らさず、そのため民が警告を受けないとき、剣が来て、彼らの中のひとりを打ち取れば、その者は自分の咎のために打ち取られ、わたしはその血の責任を見張り人に問う。：7 人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの家の見張り人とした。あなたは、わたしの口からことばを聞くと、わたしに代わって彼らに警告を与えよ。：8 わたしが悪者に、『悪者よ。あなたは必ず死ぬ。』と言うとき、もし、あなたがその悪者にその道から離れるように語って警告しないなら、その悪者は自分の咎のために死ぬ。そしてわたしは彼の血の責任をあなたに問う。：9 あなたが、悪者にその道から立ち返るよう警告しても、彼がその道から立ち返らないなら、彼は自分の咎のために死ななければならない。しかし、あなたは自分のいのちを救うことになる。」

エゼキエルは言います。「私は見張り人である。」と。救われていない人にこのままであったなら永遠の滅びに至るというメッセージを語れと言ったのに、もし、あなたがそれを語らずにその人が滅んだなら、わたしはあなたにその責任を問う、あなたは責任を果たさなかったから、もし、あなたが語ってその上で彼が信じないなら、その責任はあなたにはないと言うのです。クリスチャンに「このようなことをしてはならない」と説明をしてその上で彼らがなおも行なうならその責任は彼らにあるが、あなたが警告をしなかったならあなたに責任を問うと言います。言われていることは分かります。クリスチャンの皆さん、私たちには責任があるということです。なぜなら、この「見張り人」というのは、城壁の上に立って敵がやって来るかどうかを眠ることなくいつも見ているのです。そして、危険があれば警報を鳴らすという務めがあります。それが彼の責任です。眠ってられないのです、怠慢であってはならないのです。なぜなら、人々のいのちがその人の肩に掛かっているからです。そのことを思っパウロは言うのです。「私には責任はない。彼らが受けるさばきについて責任はない。なぜなら、私はきちんと語るべきことを語ったから。」と。

皆さん、私たちには語るべきメッセージがあります。伝えるべき救い主を私たちは知っています。今日のメッセージのタイトルは「信仰者として成功するための秘訣」としました。多くの人々は秘訣を探しています。多くの人々はまた、教会にいろいろなプログラムを導入しようとします。しかし、聖書はどこにもプログラムを教えていません。成功する秘訣はただ一つです。一人ひとりが神の前に忠実に生き続けることです。そこにしかないのです。信仰者の皆さん、パウロは無駄のない人生を生きました。神に喜ばれる人生を、みこころに沿った人生を、神の栄光を現わす人生を生きました。パウロは「私を見なってください。」と言いました。あなたはどのように生きていますか？そのように生きて人生を有意義に過ごしていますか？それとも、自分の思うように生きて神があなたに託された人生を無駄に過ごしていませんか？あなたがどのように生きるか、それはあなたの責任です。そして、神はあなたにこのように生きなさいと言われていました。皆さんはどうなさいますか？私たちは「主よ。そのように生きたいです。そのように生きてあなたを喜ばせあなたの栄光を現わして行きたい！」と、そのように願って歩んで行くのではないですか、皆さん！この残されている短い生涯をパウロの生きざまに倣って、主の栄光のために、そのためだけに生きる、そんな人生を今から過ごそうではないですか！そのためには、あなたがそのように決心することです。今、その決心をして今日から新しく歩み始めることです。